第3節　歴史・文化

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
縄文時代		縄文早期	高岡郡佐川町城ノ台・西山不動カ岩屋・東津野村船戸ほか。		
		縄文前期	高岡郡梼原町松原影地・土佐市戸波ほか。		
		縄文中期	土佐郡土佐村田井玉孱敷・高岡郡窪川町仕出原ほか。		
		縄文後期	宿毛市貝塚・高岡郡窪川町根元原・中村市有岡ほか。		
		縄文晩期	中村市山手通り・土佐郡土佐村八反坪ほか。		
弥生時代		弥生前期	中村市入田・南国市田村見当・安芸郡安田八幡宮ほか。		
		弥生中期	須崎市新荘波介・南国市田村北カリヤ・安芸郡芸西村和食ほか。		
		弥生後期	香美郡土佐山田町龍河洞・土佐郡土佐山村菖蒲洞ほか。		
大和時代		古墳期	宿毛市平田曽我山・高知市朝倉・南国市小蓮・舟岩・明見ほか。		
		崇神朝	天韓襲命が波多国造となると伝える。		
		成務朝	小立足尼が都佐国造となると伝える。		
		雄略朝	味耜高彦根尊（一言主神）を土佐高賀茂社に祀り一宮とす。		
		敏達朝	吾川郡仲村郷本尾山に種間寺を建立する。		
		用明朝	吾川郡日下郷に小村天神を祀り二宮とす。		
奈良時代	684	(天武)13	大地震のため田苑50万坪が海となる。		
	718	養老 2			土佐へはいる伊予経由の官道を阿波に改めることを許される。
	719	3	伊予国守高安王が阿波・讃岐・土佐を按察使として兼管する。		
	724	神亀 1	配流の制が定まり，土佐は遠流の地となる。 この年行基が竹林寺・延光寺・豊楽寺を建立したと伝える。		
	739	天平 11	石上乙麻呂が土佐へ流される。		
	741	13	国ごとに国分寺と国分尼寺を設ける。土佐国分寺は寺伝で天平9年の建立と伝える。		
	764	天平宝字 8	池田親王が土佐へ流される。		
	770	宝亀 1	弓削浄人父子が土佐へ流される。		
平安時代	807	大同 2	この年，空海が最御崎寺・金剛頂寺・峰寺・大日寺等をたてる。		
	823	弘仁 14	空海が金剛福寺をたてる。		
	841	承和 8	吾川郡八郷のうち四郷を分けて高岡郡を新たに設ける。		
	860	貞観 2	幡多郡の地10町を施薬院に賜る。		

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
平安時代	930	延長 8	紀貫之が土佐守となる。		
	934	承平 4	紀貫之任期が終り，帰京する。のち「土佐日記」ができる。		
	940	天慶 3	藤原純友が幡多郡に放火する。		
	1156	保元 1	藤原師長が土佐へ流される。		
鎌倉時代	1186	文治 2	梶原朝景が土佐国内の鎮圧にゆく。この年頃，源内民部大夫行景が長岡郡介良荘の地頭となる。		
	1192	建久 3	左女牛若宮領の吾川郡が京都大番役以外の公事を停められる。この年頃，佐々木経高が土佐の守護をつとめる。		
	1194	5	宇都宮朝綱が土佐へ流される。		
	1207	承元 1	法然が土佐へ流されることとなったが，ついで讃岐に還される。法然を開基として中村に正福寺をたてる。		
	1221	承久 3	土御門上皇が土佐へ流される。		
	1247	宝治 1	この年頃，極楽寺の僧忍性が香美郡大忍荘を病療・悲田院の費用にあてる。		
	1250	建長 2	一条実経が父の九条道家より幡多荘を譲られる。		
	1275	建治 1	一条家が幡多本郷の船所職および横浜の得分を慶心に宛行う。		
	1321	元亨 1	この年頃，安東藤次左衛門入道，土佐の守護代となる。守護は北条高時。		
	1327	嘉暦 2	仏師の法眼定審が金剛頂寺の真言八祖の像をつくる。		
	1332	元弘 2（正慶1）	尊良親王が幡多郡へ流される。		
室町時代	1334	建武 1	この年頃，藤原兼光が土佐守となる。		
	1338	延元 3	花園宮が土佐に漂着される。		
	1345	興国 6（貞和1）	流罪の行程が改定され，土佐は1220里，遠流とさだめられる。この年頃，長宗我部兼能が吸江庵の寺奉行となる。		
	1403	応永 10	この年頃，細川満元がふたたび土佐の守護となる。		
	1467	応仁 1	応仁の乱はじまる。		
	1468	応仁 2	一条教房が京都の乱をさけて幡多荘中村に下向する。		
	1508	永正 5	本山・大平・吉良・山田の諸氏が岡豊城を攻めて長宗我部兼序を殺す。子の国親は中村で一条房家に養われる。		
	1547	天文 16	この年頃，長宗我部国親が長岡郡大津城に天竺氏を滅ぼし，介良城主横山氏を降す。		
	1551	20	この年頃，南村梅軒が土佐を去る。		
	1558	永禄 1	長宗我部国親・元親父子，国分寺金堂を造営する。		
	1560	3	長宗我部元親が長浜戸の本の戦いに初陣。		

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
室町時代	1563	6	この年，長宗我部親貞が吉良城主となる。安芸国虎が岡豊城を攻める。		
	1571	元亀 2	この年，津野勝興，元親に降る。元親，高岡郡を平定する。		
安土・桃山時代	1574	天正 2	元親，一条兼定を豊後に追う。元親，式目15カ条を制定する。この年，元親，一条内政を大津城に移し，吉良親貞を中村城主とする。		
	1575	3	元親，甲浦城を攻略し土佐を統一する。元親，渡川の合戦で一条兼定を破る。		
	1581	9	元親が一条内政を追放し，一条氏は滅亡する。		
	1585	13	この年の春，伊予の河野通直が元親に降り，元親の四国統一がなる。秀吉が四国征討の令をだす。元親が秀吉に降伏する。		
	1596	慶長 1	イスパニア船サン＝フェリペ号が浦戸へ漂着する。		
江戸時代	1597	2	元親が22カ条の法度を定める。		
	1600	5	長宗我部盛親が領国を没収され，山内一豊が土佐の国守となる。		
	1603	8	大高坂城が落成し，一豊は浦戸よりここに移り河中山と改める。		
	1605	10	一豊死去（61歳）。		
	1610	15	河中山を高智（のち高知）と改める。		
	1615	元和 1	一国一城令により，中村・佐川・宿毛・窪川・本山・安芸の諸城が破壊される。		
	1619	5	この年阿波藩との間に香美郡槙山の境界論争がおこる。		
	1622	8		稀なる洪水（小野） このころ，野中兼山が藩政改革にのり出し，この際にカイロク堰，蔭地溝，麻生堰，四ケ村溝等の灌排事業に着手した。	
	1631	寛永 8	この年，野中兼山が執政となる。		
	1643	20	野中兼山が本山掟をさだめる。		
	1644	正保 1	この年，百人衆郷士を取り立てる。		
	1656	明暦 2	宇和島藩との間に篠山境について争論がおこる。		
	1658	万治 1		大雨洪水，幡多郡九千石余り損田（小野） 大風雨洪水，幡多郡田地水損高8,000石余，死亡男女合せて12人，流家347，潰家684（御家年代略記）	
	1659	2		大風雨，岩崎堤防決潰，八面宮池となり天神宮にも池を生ず。 中村町は，流失し安並，石見寺下に家財道具類流れたり。（中村町風水害史）	
	1660	3	兼山，弘瀬浦の掟をさだめる。		

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
江戸時代				風雨洪水，田畑（土佐）４万石余り損耗（宮崎）	
	1663	寛文 3	野中兼山が執政を免ぜられる。野中兼山が死ぬ。	幡多郡内の川筋，大洪水山中10カ村，大通村（大川村か）洪水痛に付百姓共草臥申す(野中兼山文章)	
	1665	5		大洪水，田畑損耗（中村町風水害史）	
	1666	6		洪水,田畑３万石水害を被り男10，女27人，牛馬579匹溺死し，民屋2,037軒，舟17流亡（徳川実紀） 大風雨，大川筋小川谷々つえ埋り大川筋家皆流失，人牛馬流死，中村下町大堤防切れ家一軒も残らず町は川原と成り死人夥しき事也（大海集）	
	1678	延宝 6		9月3日土佐，高知大風雨にて支封山内大膳亮豊明が所領（中村）をかけて民屋三千九十五頽廃し，堤防八百間，船二十艘損ず（県災害史）	
	1683	天和 3	土佐馬を領外に出すことを禁ずる。郷中へ制度を定めて発布する。		
	1689 1696	元禄 2 9	中村３万石が没収される。 幕府より中村３万石を還付せられる。		
	1702	15		９月，大風雨，高潮両度の風雨にて損耗十六万石余，永荒地二千石余（中村町風水害史） 大水両度，９月の水山路庄屋内庭迄入。此水に木戸の瀬埋り,入田，津蔵渕，古津賀，鍋島より農夫求り掘申事（小野）	
	1703	16	藩札が発行され，領内への通用がはじまる。		
	1704	宝永 1		８月度々洪水，損耗八万石余。(中村町風水害史)	
	1707	4	藩札の通用を停止する。大地震がおこる。		
	1709	6		大雨洪水，８月風雨洪水（中村町風水害史）	
	1721	亨保 6		８月27日より９月６日まで度々大洪水あり，作物大傷，幡多郡中村町中水の高さ地より六尺(約２ｍ)人々山へ登り,中二日山に在り(中村町風水害史) ８月洪水，同五日渡川筋三十年来の洪水也（広恵簿）	
	1722	亨保 7		８月４日洪水，大損耗，前年に倍する大洪水なり。世に所謂「丑寅の洪水」と称するは亨保６，７年の洪水のことなり。(中村町史)	
	1727	12	高知城下1300余戸が焼失し，高知城も類焼する。		
	1739	元文 4		大水，在所中（山路）へ上る。幡多郡御貢物難渋（小野）	

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
江戸時代	1741	寛保 1		７月洪水大風，在所中（山路）家十三軒潰家と成る。	
	1748	寛延 元		天龍川の普請を幕府より命ぜられる。	
	1749	2		5-21洪水飢饉（太平寺覚書）	
	1752	宝暦 2	この年，国産方を創設して御蔵紙・平紙の制を設ける。		
	1753	3	井沢に番所が置かれ，渡川を通過する物資に課税されるようになった。		
	1757	7		９月大風雨潮入(中村町風水害史) 大風大雨洪水国中家傷，諸木根こげ傷。御城下猶又大風，御城，御屋敷，諸方御会所，天神社寺々不残傷（小野）	
	1762	12		８月15日大風雨，山潮，本郡死者1-6 亨保丑寅以来の洪水なり。（町史）	
	1763	13	庶民を救済するため諸口禄を免ずる。領民の北山口番所の通行を許す。この月，幡多郡を開殖するため郷士を募集する。		
	1765	明和 2		８月２日大風大水，８月12日洪水，往還堤をば限，８月22日大風雨，９月堤より上二尺程越え夜に入り居宅に入る（下略）（宮崎）	
	1772	安永 1		大風雨損耗（水害史）	
	1782 1784	天明 2 4		８月大雨洪水立毛大傷（中略）百姓不残 未進（貢物）に相成。飢に及ぶ者数々(下略)（小野） 大雨大洪水。田畑損耗（小野）	
	1785	5		８月12日より18日まで大雨（水害史）	
	1787	7	城下の窮民が騒動し，各地に一揆がおこる。藩政の改革が開始される。		
	1788	8		８月23日より26日まで大雨洪水。此年前年にて5日より能く降り又，土用も降り続き，夫(それ)より７月８月９月月々20日の雨にて立毛も六歩通りの所務(収穫)にて一統不景気,困窮止り申ず候。(小野)	
	1792	寛政 4		９月12日大風雨。家屋破損六千二百余軒。死者十一人。（水害史）	
	1797	9	郷士の高村退吾が殺され，郷士騒動がおこる。		
	1804	文化 1		８月30日より風雨に相成り，31日朝，卯刻（前６時）頃より戌の刻（後８時）頃迄大洪水。人家（山路）へ水上り庄屋宅へも水上り，敷板より水境5寸にして当り中位。	
	1808	5	幕府の調量方の伊能忠敬がくる。		
	1815	12		８月風雨洪水。(県内損害有) 幡多郡ニテ死人一人損田二千九百	

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
江戸時代				三九四石余，堰切崩二万二千五十間余，流家十二軒（水害史）	
	1816	13		９月13日14日大風洪水（水害史）	
	1822	文政 5		７月大洪水（町水害史），小女町にある郡方役所の土居屋敷へ移転したるは文政５年７月の洪水に驚き移転になりしと言う。この時新堤出来たる由。（宮崎）	
	1826	9		６月26日大風雨洪水。田畑損傷（水害史）宇和屋，吸田屋義損記録あり。	
	1834	天保 5	５カ年の省略令を出す。行政整理をおこなう。		
	1835	6		８月17日前夜より大風雨。	
	1841	12	藩政改革を宣言する。9-6藩主の親政を宣言する。		
	1842	13		７月11日洪水所々大破。８月１日洪水先の水より七，八尺ばかり大なり。作物被害甚大。（水害史）	
	1843 1844	14 弘化 1	おこぜ組の獄がおこる。 医学館を帯屋町に開く。西洋流砲術を伝習する。		
	1846	3		４月大雨度々出水。８月７日風雨。９日風雨甚しく出水。29日又風雨激しく30日益々甚しく人家数多破損。９月夜大風雨。此年数度の洪水にして俗に「丙午の洪水」という。（水害史）	
	1849	嘉永 2		８月暴風，大洪水。市中内，船廻り来る。御用船北丸には喜太郎親子乗り，南丸には十兵衛乗る。中白の幟を立てる。土佐國太守様之御船も中白幟也。水は座より一尺揚る。中白の幟を立てる。風は荒し雨は暴し下田損浜切れ居ると聞く。下町築地（堤防）早々に切れると夜分人々戸をして通る。 二階へ荷揚げの最中なり。（中略）米は少なし，御売米を下渡（さげわたし）候也。古今稀なる暴風雨に付皆迷惑相極（きわめ）候。 裏の新築近傍は海の如し言々。一 註新堤現本町三丁目四丁目両より西，現神宮へ通ずる道をつき上げて堤としたもの。（上岡利太郎手記） 東風，夜分微雷大風家々破損（水害史）	
	1852 1853	嘉永 5 6	中浜万次郎がアメリカよりかえる。新たに安芸・香美・高岡に郡奉行をおき，海防を厳重にする。大砲の鋳造をはじめる。吉田東洋が参政に登用される。		
	1854	安政 1	砲術家の田所左右次を鹿児島に派遣する。	此年は盆に大風雨，盆祭は出来ず。市中は上町辺水揚る。（上岡）	
	1857	4	海防のための部署をさだめる。		
	1858	5	吉田東洋が仕置役となる。	８月21日，22日大風雨洪水（宮崎）	

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
				町口築地の辺位にて相済む。後川は道路，上町は紺屋良蔵辺位（上岡）	
	1859	6	山内堂容が隠居する。容堂が幕府より謹慎を命ぜられる。岩崎弥太郎が長崎に出張する。		
	1860	万延 1		６月から７月にかけて度々風雨出水（中村町風水害史）	
江戸時代	1861 1862 1863 1864	文久 1 2 3 元治 1	武市半平太が土佐勤王党を結成する。海南政典が制定される。 この年，洋帆船をつくる。 吉村虎太郎・坂本龍馬らが脱藩する。文武館（のちの致道館）が開校される，吉田東洋が暗殺される。 8-17吉村虎太郎が同志と大和で挙兵する。武市半平太らが投獄される。 清岡道之助らの二十三士が奈半利川原で処刑される。		
	1865	慶応 1	武市半平太が獄中で自刃する。	２月１日雷雨出水（安政５年以来の水なりという。） 同年夏，暴風雨（上岡）	
	1866	2	坂本龍馬が藩長連合の周旋に成功する。開成館を設立して事業をはじめる。後藤象二郎が長崎に出張する。 この年藩札を発行する。	８月９日，10日甚雨出水，９月15日甚雨西風激しく。 稲大損傷，凶作（中村町風水害史）	
	1867	3	西郷隆盛が来高し，容堂と会談する。海援隊が組織される。薩土討幕の密約がむすばれる。 薩土盟約がむすばれる。陸援隊が組織される。 英国公使パークスが須崎にくる。 大政奉還建白書を将軍慶喜に提出する。坂本龍馬・中岡慎太郎が暗殺される。王政復古の令が発せられ，容堂は小御所会議で徳川氏救済のために努力する。		
明治時代	1868 1869	明治 1 2	東征の土佐藩兵が江戸にはいる。 版籍奉還が聴許され，山内豊範が高知藩知事となる。		
	1870	3	藩境を自由に通行させる。四民平均の令がでて藩政の改革がおこなわれる。	９月風雨８出水，古老伝「此度の出水は嘉永二百年以来なり。」と然れ共同年に比較すれば一，二尺はさがるべしと思われる。（中村町風水害史）	
	1871 1872 1873	明治 4 5 6	西郷隆盛・木戸孝允が来高して時事を談合する。 廃藩置県令が発せられ，高知県となる。 山内容堂が死ぬ。 高知城を公園とする。共立社が高知新聞を発行する。	８月風雨出水，難破船多し，10月又風雨出水（中村町風水害史）	
	1874	7	武市熊吉らが岩倉具視を襲撃する。後藤・板垣らが民撰議員設立の意見を建白する。高知に立志社が創		

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
明治時代			立される。		
	1875	8	板垣退助が大阪に愛国社をおこす。高知裁判所が設置される。		
	1876	9	阿波国を高知県に編入する（明治13年３月に分離する）。	10月夜，甚雷雨，中筋川，後川の川筋等山崩れ多く没家，圧死者多し，耕地の被害又甚大（宮崎）	
	1877	10	立志社の獄がおこる。海南新誌・土陽雑誌を立志社より刊行する。		
	1878	11	海南新誌と土陽雑誌を合併して土陽新聞とする。第三十七・第八十国立銀行が設立される。大小区制を廃して郡町村を施行する。		
	1879	12	県会を開設する。		
	1880	13	片岡健吉が国会開設の請願書を太政官に提出する。		
	1881	14	板垣退助が東京に自由党を組織する。		
	1882	15	板垣退助が岐阜で刺される。海南自由党が組織される。高陽新聞が発行される。		
	1883	16	立志社を海南自由党本部とする。		
	1884	17	自由党が解散される。	８月台風，730ミリ程度の台風。大風雨少し添う。作物大傷み（中村町風水害史）	
	1885	18	岩崎弥太郎が死ぬ。	７月台風。735ミリ程度の台風。暴風雨出水。堤防破壊し家屋橋流れ田畑損傷。死者多し。（中村町風水害史）	
	1886	19		８月台風。戸々家具，木材，器具等の流出すること累々として絶えず，午後６時風雨漸く衰たるも水量減せず午後７時に至りて漸く減水を見るに至れり。同５時の水量の最高は四万十川に於て平水より２丈９尺5寸。	
	1887	20			高知－伊野間に馬車が開通する。
	1889	22	高知市の市制が施行される。		
	1890	23		９月台風。九州，四国を横断した台風。この洪水は後に渡川改修工事の計画対象洪水となった。四万十川，後川の水量は頓に増加し低地は勿論，上町本町辺も瞬く間に浸水した。河水は平水より約３丈の増水で町内の家屋は高所の若干を残して殆んど浸水した。（中村町史）	高知汽船会社が設立される。
	1891	明治 24	板垣退助が立憲自由党の総裁となる。		
	1893	26			四国循環県道が完成する。
	1896	29	土佐銀行が設立される。土佐貯蓄銀行が設立される。高知銀行が設立される。		

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
明治時代	1897	30	高陽銀行が設立される。後藤象二郎が死ぬ。	旧河川法，砂防及び森林法制定。	
	1899	32	土佐商船株式会社が創立される。高知基督教会・土佐基督教会・天主公教会等が設置される。	８月台風。風勢は強烈で19年の暴風雨に数倍し戸外の通行は全然できなかった。被害は甚しく全壊66戸，半壊36戸，大破725戸，その他付属建物600余棟で中村尋常小学校も倒壊した。	
	1900	33		８月台風。低速のため雨台風。雨量23日大正250，梼原399，21～25日，大正605，梼原799。	
	1903	36	土佐電気鉄道株式会社が創立される。	７月大雨。８日雨量中村338，窪川305。浸水50戸，平水より21尺（中村町風水害史）	土佐電気鉄道株式会社が創設される。
	1906	39	県営の甫喜ケ峰水力発電所が起工される。大阪商船が阪神航路を独占する。		
	1907	40	皇太子（大正天皇）が来高される。電話交換局が設けられる。	９月台風。735㎜の台風。明治23年以来の洪水。町の高地とせる京町，中ノ町，市ノ辻辺まで床下浸水（中村町風水害史）６日雨量，窪川325，梼原341，大正193。７日窪川130，梼原272，大正251，4～8日梼原743，大正597，中村290。	
	1910	43	県下にペストが流行する。		高知にはじめて自動車がはいる。
	1911	44	幸徳秋水が処刑される。		
大正時代	1912	大正 1	高知瓦斯株式会社が設立される。土佐製紙株式会社が設立される。	９月台風。夜中に県の東部海岸を掠めて北上した700㎜の大型台風雨量は22日，大正300，梼原328，中村225㎜，20～23日大正526，梼原471，中村431。道路堤防の破損，家屋の全潰流失７，半潰10があった（中村町史）	
	1914	3		９月台風。740㎜の台風雨量は梼原197，窪川189，中村160㎜。死者３，重傷２，住宅全潰34，半潰37，大破47，流失１，非住家全潰34，半潰37，大破21，後川橋流失（中村町史）	
	1915	大正 4		９月台風（高潮）710㎜の台風。梼原付近では６～8日各日200ミリ以上を計り，台風関係の総雨量は900ミリを越すほどで風雨害強かった。６～８日雨量中村160，大正363，梼原602。	
	1918	7	この年の秋より，スペイン風邪が流行する。		
	1919	8	板垣退助が死ぬ。		
	1920	9		８月台風。750㎜台風。中村町の被	

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
大正時代				害は全潰４,流失１,田畑111町歩,桑園56町歩，橋梁流失２であったが幡西，渭南地方の惨状は甚しく特に宿毛町松田川堤防が決潰して人家の流失，人馬の溺死が多かった。郡下の罹災範囲は30ヵ町村に及び人畜の死傷200越え,家屋の倒壊流失450に及んだ。（中村町史）	
	1922 1923 1924	11 12 13	摂政宮殿下が来県される。 高知高等学校が開校する。四国銀行が設立される。		高知－須崎間の鉄道が開通する。
	1925	14	高知市に都市計画法が指定される。 高知市の上水道ができる。		
昭和時代	1927	昭和 2	浜口雄幸が民政党総裁となる。	４月大雨（低気圧） 気圧の谷に伴った発達した低気圧の南岸沖通過による雨。推定具同水位９m35。 浸水86戸，麦桑等2.6万円,渡川平水より23尺余，後川17.8尺余（中村町風水害史）	
	1928	3	坂本龍馬の銅像の除幕式がおこなわれる。	８月台風。 740㎜の台風。町内浸水明治40年以来の大洪水。	
	1929	4	浜口雄幸が内閣を組織する。		
	1930	5	四国中央高知発電所ができる。浜口雄幸が東京駅で狙撃される。		
	1932	7	高知放送局(JORK)が開局する。 北村久寿雄がロサンゼルスの第10回オリンピック水泳1500メートル自由型で優勝する。		
	1934	9		９月室戸台風（高潮） 暴風雨時間が短かく大被害が安芸郡に限定された。具同水位21日11時７m45。	
	1935	10	中岡慎太郎の銅像の除幕式がおこなわれる。 寺田寅彦が死ぬ。	８月台風。 Ａクラスの雨台風で渡川の洪水は明治23年以来となり，被害甚大であった。	国鉄土讃線の高知－高松間が全通する。
	1936 1938 1939	11 昭和 13 14	玉錦が横綱となる。		浦戸港を高知港と改める。 高知港が開港される。
	1945	20	高知市が大空襲を受ける。レンス大佐の指揮する連合軍が高知に進駐する。	９月枕崎台風。猛烈な台風（910mb） 渡川坂本水位は，18日４時8.47m（具同換算8.25m）（直轄災害） 坂本瀬割堤および佃築堤が192,000円の被害。 10月阿久根台風。955mbの台風。 坂本水位10日21時６m82。	
	1946	21	山下奉文がマニラで刑死する。	７月台風。960mbの中型台風。 中村町浸水500戸，町内舟を使う（直轄災害）坂本瀬割堤ほか数カ所で3,276,000円の被害。	

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
				南海大地震がおこり，大きな被害をうける。	
昭和時代	1947	22	最初の民選知事に川村和嘉治が当選する。		土讃線が影野まで開通する。
	1948	23		8-26大雨（熱低） 弱い熱低（1,000mb）に刺激された大雨具同水位26日18時７m20。 中筋川支流渡川の濁水が逆流，具同村馬越付近から平田村森にかけて県道上は１m余りの大出水，中筋川沿川水田1,500町歩浸水(高知新聞昭和23年８月27日)。	
	1949	24	高知県が日本南部米国第一集団占領区の管轄となる。高知大学・高知女子大学が開校される。		
	1950	25	南国土佐産業博覧会が開かれる。 天皇陛下が高知県に巡幸される。	７月台風９号中型台風。 具同水位29日20時６m20。 （直轄災害）坂本瀬割堤で築堤土砂等が流失し1,050万円の被害。 ９月中型の台風。具同水位は14日３時7.85mに達し，中村町は泥海中の孤島と化した。	
	1951	26		７月台風６号（ケイト）976mbの台風。 具同水位２日９時７m35。 後川上流左岸秋田，安並地先の築堤に着工。	土讃線が窪川まで延長される。 国鉄バスの高知－松山間の急行が開設される。
	1952	27	高知県総合開発審議会が発足する。	台風２号（ダイナ）970mbの台風具同水位５m46。	
	1953	28	全国教育研究大会が高知で開催される。高知短期大学が開校される。 民間放送ラジオ高知(JOZR)が開局する。国体の相撲大会が開かれ，天皇・皇后両陛下が来高される。		２級国道松山高知線が指定される。（現国道56号線）
	1954	29	宿毛市・中村市・須崎市･安芸市･土佐清水市が発足する。足摺国定公園の指定が決まる。	台風5号(グレイス)中型台風（964mb）具同水位18日15時７m16。 台風12号。大型台風。 台風13号の豪雨により具同水位14日６時８m88は近年の記録となった。	高知－大阪間に準定期空路が開かれる。
	1955	30	高知城天守閣が改築される。知事選挙に溝渕増巳が当選する。	台風22号。940mbの台風。 具同水位30日14時７m38。 台風23号。970mbの台風。 具同水位４日12時７m70。実崎堤防護岸の崩壊。	
	1956 1957 1958	昭和 31 32 33	浦戸湾の巡航船が休止する。板垣退助の銅像再建の除幕式がおこなわれる。 牧野富太郎が死ぬ。中村放送局が開局する。 NHK高知テレビ放送局が正式電波を出す。		道路整備緊急措置法施行。
	1959	34	土佐市，室戸市が発足する。 四国地方開発特別法制定推進協力高知県協議会が発足する。	台風６号。970mbの台風。 中筋川流域水田200ヘクタール冠水。中村市荒川の国道浸水(高知新	本州四国連絡橋について建設省調査開始。

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
				聞Ｓ34.8.9）上町地先外３ヵ所の護岸根固等が24,142千円の被害。	
昭和時代	1960	35	高知港の開発計画が決定する。室戸岬測候所に大レーダーがすえつけられる。		四国自動車道路網調査を開始。
	1961	36	高知－東京，高知－松山間の即時電話が通ずる。 NHK教育テレビが開局する。	第二室戸台風。（18号）最大級の台風。 具同水位16日16時７ｍ54。 後川および本川の低水護岸。根同等５ヵ所で23,040千円の被害。中筋川後川はんらん。楠島一本松，安並部落。孤立のおそれ，国道中村市荒川，磯の川間2.5㎞浸水。 （高知新聞Ｓ36.9.17）	県議会建設委員会で本州四国連絡橋は道路鉄道併設とすることを確認する。 四国循環鉄道の東部線をつくることが決定される。 土讃線に初めて急行が走ることとなる。
	1962	37	高知放送の中村テレビ局が開局する。		56号線が１級国道に指定される。
	1963	38	高知工専が開校される。幡多地方総合開発促進協議会が結成される。	台風９号。965mbのＡ級台風。 具同水位は９日10時指定水位3.5ｍになり，その後急激に増水して１時間に80～90㎝の早さで上昇し14時には警戒水位6.5ｍに達し，９日24時10ｍ45のピークを記録して昭和10年の既住最高水位におよばぬこと僅か89㎝。計画高水位に対しては僅かに47㎝を残すのみとなった。 死者１，負傷者５，全壊14，中壊122，流出家屋８，床上浸水2145，床下浸水1100，水田流失90ha，水田冠水1400ha，畑流失66ha，畑冠水420ha，罹災世帯数3124戸，罹災者概数12,800人。 後川の古津賀堤防２ヵ所，佃堤防１ヵ所が溢流により破堤したほか，護岸，根固，漏水などで本川５，後川１，中筋川１ヵ所が災害を受け総額は149,305千円におよんだ。	
	1964	39	室戸・阿南の国定公園が決まる。 高知高校が全国高校野球選手権大会で優勝する。	台風20号。930mbの台風。 具同水位25日11時７ｍ08。 山路背割堤防外２ヵ所で護岸，根固等32,104千円の被害。	
	1965	昭和40	高知気象台開設以来の最高気温38.4度を記録する。	台風23号。945mbの台風。 具同水位10日15時７ｍ20。古津賀堤防外７ヵ所の低水護岸が73,566千円の被害。 台風24号。955mbの台風。 具同水位17日18時6ｍ70。入田地先外７ヵ所で低水護岸根固が61,606千円の被害。	一般国道56号線に指定される 高知－東京間の全日空直行便が開設される。
	1966	41	宿毛湾入漁協定が調印される。南国産業科学大博覧会が開催される。	大雨台風。 沖縄付近に発生し西進した台風13号と九州南西海上から宮崎市付近に上陸した台風15号により，高知県は連日の大雨。具同水位16日２時６ｍ78。	高知－宮崎間に空路が開かれる。 国土開発幹線自動車道建設法において，四国縦貫自動車道及び四国横断自動車道を予定路線として規定する。

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
				後川を中心として，低水護岸12ヵ所が86,974千円の被災。	
昭和時代	1967	42	一地区一工業化を目標とする県の開発構想が具体化する。水資源開発公団が早明浦ダム建設所で開所式をおこなう。国道32・33号線の完成祝賀式が開かれる。吉田茂元首相の県葬がおこなわれる。		高松－高知間の南四国急行バスの運行が開始される。
	1968	43	赤字バス路線の休廃止申請。海中公園構想まとまる。県の明治100年記念事業。県交通の経営難。高知港口でタンカー転覆。ジョン万次郎銅像除幕と宇宙中継。	台風10号。980mbの台風。 具同水位29日18時6.63ｍ。 間崎地先ほか４ヵ所で護岸，根固等96,958千円の被災。	
	1969	44	大方町で七人殺傷事件。中内力副知事が退職。県交通が大幅な企業縮小。交通事故，史上最悪の記録更新。師走選挙（衆議院），東洋町役場問題で混乱。県の海洋性開発構想まとまる。「希望の家」南国市へ。		国道九州・四国フェリー（国道197号）開通。
	1970	45	高知空港でセスナ機爆破事件。県下に公害問題相次ぐ。足摺海中公園スタート。シラスウナギ騒動起こる。県下の交通事故最悪記録を更新。	台風10号。995mbの台風。 具同水位21日18時８ｍ24。 河川護岸の欠壊，根固の流失を生じた。	国鉄中村線が開業。 古津賀バイパス完成。
	1971	46	溝渕知事が５選。足摺，国立公園昇格へ。高知バルブ廃液管を実力封鎖。県交通に会社更生法。新装高知駅が開業。高知港にフェリー時代。宿毛湾原油基地化問題。	台風23号。 ピーク流量は本川具同で9850ｍ/ｓ 支川中筋川では堤防を溢水した。	
	1972	47	繁藤大惨事。足摺国立公園が誕生。浦戸大橋の開通。師走選挙（衆議院）。白滝鉱山街の大火。よみがえる江ノ口川。くすぶる宿毛湾問題。足摺海底館のオープン。南国市の水門封鎖事件。	台風９号。 下流の具同で218㎜。ピーク流量は本川具同で7620ｍ/ｓ。支川中筋川では堤防を溢水した。	国道56号高知県内の一次改築を完了。
	1973	48	早明浦ダム完成。松方コレクション展。水銀汚染魚騒ぎ。城北中の大火。浦戸大橋で投身自殺相次ぐ。高知市の物価上昇日本一。県民体育館の竣工。飲酒運転に逮捕主義。		横波黒潮ライン開通。
	1974	49	春野町の議会ぐるみ選挙違反。県漁連不正融資事件。 新荘川にニッポンカワウソ。日本シリーズで本県コンビ活躍（弘田・有藤）。土電安芸線の廃止。 県外分水反対を決議。第11昌栄丸転覆，14人死亡。	16号台風。992mbの台風。 具同水位２日３時６ｍ93。 渡川は水衝部における護岸根固の洗掘等でかなりの被害。	国鉄予土線開通。
	1975	昭和50	高知高，選抜野球日本一。中内力新知事の誕生。溝渕知事引退。安芸の猟銃乱射事件。佐川町の集団赤痢禍。手結山偽装殺人事件。高知市長に坂本氏３選。マグロ漁船の偽装沈没事件。	台風５号。台風６号。 台風５号（990mb），台風６号（970mb）。 台風５号具同水位17日18時8ｍ19。渡川で支川中筋川の有岡地先では溢流による破堤35ｍ。他の地区でも裏法面崩壊４箇所，本川，後川でも低水護岸の洗掘被害を受けた。	

時代	西暦	年号	地方史	災害史	交通史
昭和時代	1976	51	皇太子ご夫妻来高。県登山隊がラムジュン・ヒマールに登頂。仮谷建設相が急死。総選挙，高知全県区は保革逆転。県民文化ホールが落成。中村市長選で保守が“くじ引き”一本化。国立高知医大が開学。ひめゆりの塔で「想思樹の歌」。通学バスが吉野川に転落。	台風17号。 950～955mbの大型台風。 災害は全壊60戸，半壊48戸，流失4，道路損壊318，橋梁流失24，堤防決潰20。	中村バイパスの事業化。
	1977	52	中村高校センバツ準優勝。長岡２年連続学生・アマ横綱。異常寒波。		本四連絡橋の早期完成ルートとして，児島－坂出ルートとすることに閣議決定。
	1978	53	高知商，輝く準優勝。坂本前高知市長死去。長岡超スピード出世。高知医大スタート。横山高知市長誕生。		56号窪川バイパス供用開始。
	1979	54	郵政大臣に大西さん。県知事に中内氏再選。宮尾さんに直木賞。高知スモン訴訟が和解。	台風16号。 ピーク流量は本川具同で5720㎥/s。 支川中筋川では堤防溢水を起こし多大の被害を受けた。 台風20号。 ピーク流量は本川具同で5320㎥/s。	
	1980	55	高知商選抜で初優勝。窪川原発にゆれる。冷夏農作物などに被害。大豊トンネルで衝突事故。	８月洪水。 ピーク流量は本川具同で4350㎥/s。 支川中筋川では堤防溢水を起した。	
	1981	56	窪川原発大揺れ。高知医大付属病院が開院。高知競馬で八百長。九州場所で朝潮準優勝。明徳高神宮大会で初優勝。		
	1982	57	窪川の原発条例成立。高知市長に横山さん再選。繁藤裁判で原告勝訴。明徳高の松田監督死去。 田村遺跡から出土相次ぐ。	台風13号。ピーク流量は本川具同で10230㎥/ｓ。 台風19号。 中筋川では堤防溢水を起した。	高知－福岡間に空の新路線。
	1983	58	朝潮大関となる。 中内知事三選。 くろしお博起工式。 県下の青年ら龍馬像修復。	台風10号。 中筋川で堤防溢水。	高知空港にジェット機就航。
	1984	59	くろしお博開催。 四万十川ブーム。 窪川原発事前調査協定に調印。 溝渕前知事が死去。		
	1985	60	暴力団追放市民運動盛り上がる。 龍馬生誕150年。 伊野商がセンバツ初優勝。 朝潮初優勝。		土讃線開通50周年。
	1986	昭和61	高知市長に横山氏３選。 円高不況で造船ピンチ。 国民休暇県高知を宣言。 県下にもエイズ感染者。		
	1987	62	エイズ感染女性が出産。 中内知事が４選。 落雷でサーファー６人死亡。	10月，台風19号。 ピーク流量は本川具同で4064㎥/s 中筋川で堤防漏水。 中村市内の水田冠水450ha，道路損壊20カ所。	高速道路，大豊－南国間開通。 JR四国スタート 足摺サニーロード開通。
	1988	63			

第3章　河川事業

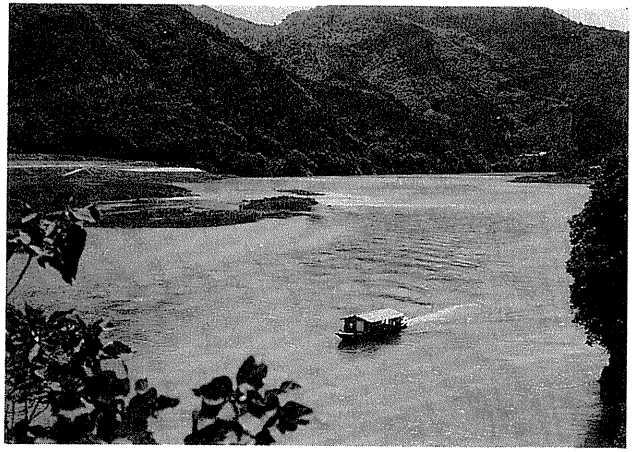
第1節　渡川の姿

1. 流域の概要

渡川水系は，その源を高知県高岡郡東津野村の不入山（いらずやま）（標高1,336m）に発し，南に流れ，高岡郡窪川町において流れを西に向け，途中，渡川の第一の支川である梼原川を合流し，幡多郡西土佐村において再び流れを南に転じ広見川，目黒川，黒尊川を合わせ，中村市佐田より中村平野に入り，後川及び中筋川を合わせ，中村市下田において太平洋に注ぐ。S字型に大きく蛇行する渡川の幹川には，大小合わせて71と多くの支川が流れ込んでいる。

流域面積2,270km²（四国第2位），幹川流路延長は196km（四国第1位）に及ぶ流域は，高知・愛媛両県にまたがり，関係市町村は，3市7町6村で，四国西南地域における社会，経済，文化の基盤をなし，本水系の治水，利水，環境についての意義は極めて大きい。

流域の地形は，中央構造線の南側に位置する外帯河川を呈し，たび重なる造山運動によって形成された山地部がほとんどで，平野は地溝帯である中筋川流域にわずかにみられるのみである。また，渡川は，中流部では激しく蛇行し，一度は海岸に近づきながらも再び内陸に向かって流れるという特異な形状である。



渡川入田地先

流域の地質は，水源地付近を東西方向に延びる仏像構造線の北側は秩父古生層であるが，流域の大部分は砂岩，頁岩等からなる四万十帯で構成されている。この四万十帯は，主に中生代白亜紀の地層より成り，中村より海岸沿いの地域には古第三紀の地層が分布している。

流域の気候は高地部を除いて温暖であり，年間降雨量は概ね3,000㎜に達し，その降雨の大部分は台風期及び梅雨期に集中している。

流域の自然環境は，水源地付近が，四国カルスト県立自然公園に指定されているのを始め，山あいをゆうゆうと流れる渡川など，すばらしい自然景観をみせている。植生は，主

表３－１－１　流域の諸元

河川法河川数	流域面積（㎢） 山地	平地	河川区域	計	幹川流路延長（㎞）	年間総流出量（億㎥）	河状係数 大正	具同
319	1,959	267	44	2,270	196	36.3	2,370	570

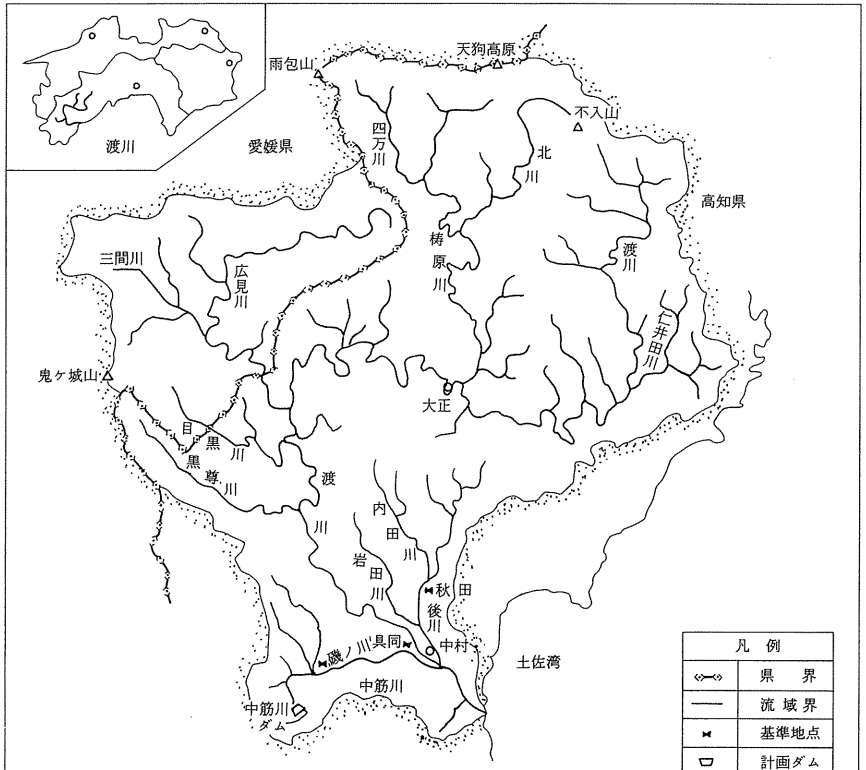


図３－１－１　渡川水系流域図

に常緑樹林，針葉樹林からなり，平地や低平地でシイが優勢で，標高500ｍ以上になると，モミ，ツガ，カシが卓越し，二次林のアカマツも広い範囲を占め，流域の最高標高付近ではシコクシラベの林相もみられる。流域は自然性が高く，動物相も豊富に分布しており，一部には天然記念物のカワウソも生息しているといわれている。魚類は，鮎を始め39科79種の生息が確認されており，感潮域では有用藻類のアオサ目に属するスジアオノリが生息し，ヒトエグサの養殖も行われている。

流域の土地利用は，流域の88％を山地が占め，残り11％が農耕地，１％が宅地で，平野は下流域の氾濫域にわづかにみられ，中村市の中心市街地を形成し，人口・産業が集中している。

これらの流域は，高知県の中心地である高知市と地理的に隔絶されており，一次産業への依存度が高いため生産性も低く，過疎化の進行や高齢化等，流域の社会環境面では多くの課題を抱えている。

2.　主要洪水

渡川沿川市町村の災害は大部分が洪水により惹起されている。中村市市街地も，現在では昭和４年から始まった渡川改修工事により計画高水量（具同地点14,000㎥/sec）を対象とした本川および後川の堤防がほぼ概成し一応外水より防御されているが，昔は本川側からの氾濫に備えた岩崎堤防ならびに長池堤防があるばかりで，それも現在のような強固なものではなく，後川側が無堤であったこととあいまって低地部は毎夏の小出水でも浸水し，中規模の出水で市街が浸水し，大洪水となると岩崎，長池堤防が欠壊して中村町が水没流失するというような悲哀の歴史を繰り返して来た。

中筋川沿川は，改修工事の進捗により昭和39年に甲ヶ峯の開削が竣功し，中筋川が旧合流点より4.9㎞下流の実崎地先で本川と合流するように付け替えられ，本川の背水影響が軽減（洪水時の水位低下約3.8ｍ）し，かつ沿川には堤防が一部の地区を除き概成したことにより，現在では洪水被害は激減するに至ったが，昔は，本川の洪水が中筋川低地帯へ逆流し，洪水の度ごとに水底に没したものである。この地域は湿地帯のため，藺草，杞柳を主としていたが，稲を植付しても，収穫できるのは10年に１度の干ばつの年しかないというような悲劇を繰り返してきたのである。

改修工事着工後の大洪水は，昭和10年８月，昭和38年８月出水であるが，この程度の大出水を含めて渡川流域では昔は浸水は日常の事柄であり，このため風水害に際してとるべ

き注意事項が昭和13年（本年旧市街地を守る堤防概成し，これ以降浸水を免れるようになった年）に出版された『中村町風水害史』に依然として記述してあるのは興味深いことである。

(1)　渡川の洪水の原因

四国地方は，中央部を東西に走る四国山脈によって北四国と南四国に区分され，地勢気候ともそれぞれの特色がある。

渡川流域は，南四国地域に属し年間降雨量が3,000㎜以上にも達する我国有数の多雨地帯である。しかもその降雨のほとんどが台風に起因し，集中的な豪雨となるため，大規模な洪水がしばしば発生している。

(2)　明治以前の水害

渡川の洪水記録は，寛弘６年（1009年）にはじまり，その後の古い洪水についても数多く書き残されている。とくに元禄16年（1703年），宝永元年（1704年）には，中筋川流域の被害が多く，農民の苦しみを記した古文書が沿川の村々に数多く残されており，これらの記録によれば，毎年のように洪水による被害が発生している。

(3)　明治以後の水害

渡川改修事業は昭和４年に着手された。改修計画としては，高水防御に重点をおき，渡川の河道掘削，新堤の築造が行われた。後（うしろ）川は本川合流部に背割堤，新堤及び佐岡（さおか）地先のショートカットの施工により中村町を洪水より防御した。また，中筋（なかすじ）川も同様に背割堤の新設，所要の河幅に掘削するとともに堤防を築造した。

上記のように，渡川改修によって全域にわたって堤防が築かれたため，渡川本川及び後（うしろ）川は近年洪水が氾濫することなく河道を流下するようになり，河道の平面的，縦断的な変化も少なく安定した河道を保っている。しかし中筋（なかすじ）川は暖流河川であるほか河積の不規則性や築堤の遅れなどから毎年の様に越水氾濫を繰り返している。

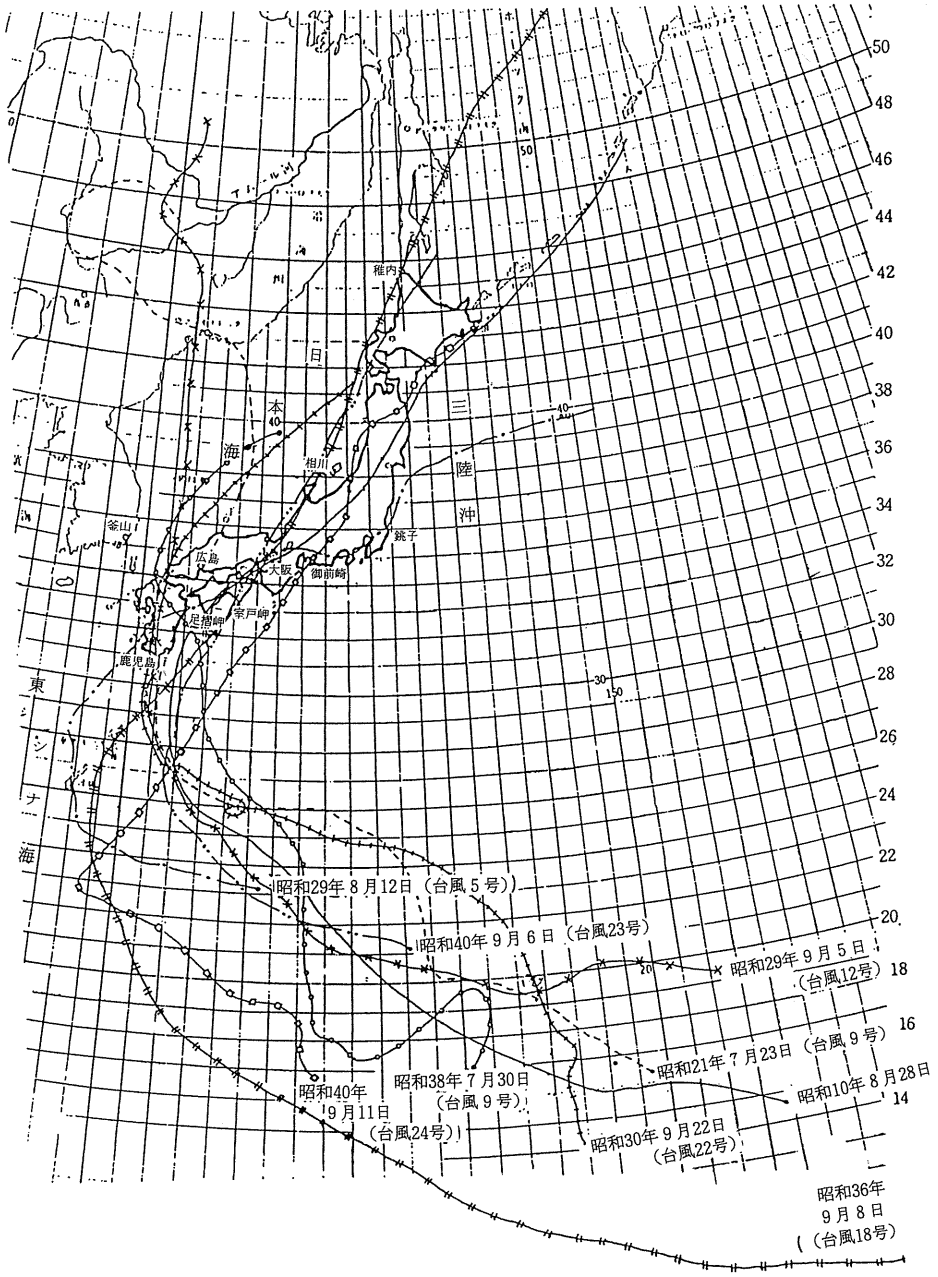


図３－１－２　著名台風経路図（昭和10年～昭和40年）

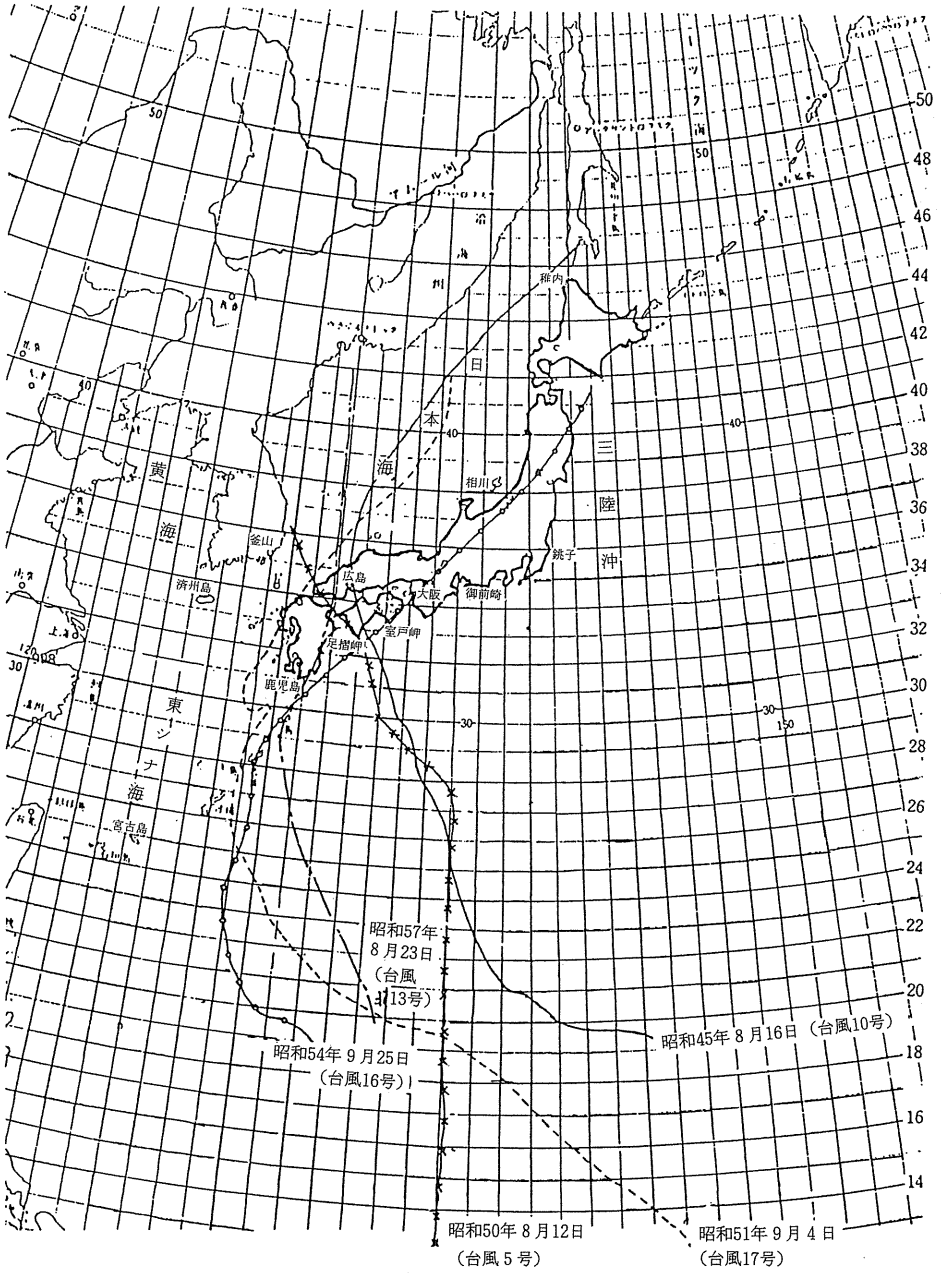


図３－１－３　著名台風経路図（昭和41年～昭和57年）

表３－１－２　最近の洪水被害記録

災害発生年月日	洪水原因	被災状況	
		河川災害	一般災害
明治23年９月11日	台風	長池堤防破堤	
昭和10年８月28日	台風	入田堤防（本川）破堤	旧中村町水没（水深５～９ｍ）
昭和36年９月16日	台風18号	低水護岸，根固の被災	
昭和38年８月９日	台風９号	堤防溢水により破堤（古津賀） 低水護岸の被災	浸水面積 4,502ha，床上浸水 896棟 全壊流出 40棟 半壊床上浸水 4,186棟
昭和39年９月25日	台風20号	低水護岸，根固の被災	（水害統計に記録なし）
昭和40年９月10日	台風23号	護岸，根固の被災	浸水面積 64ha，床下浸水250棟 全壊流出 8棟 半壊床上浸水 82棟
昭和41年８月15日	台風13号	〃	浸水面積 2,185ha 半壊床上浸水 87棟 床下浸水 416棟
昭和45年８月21日	台風10号	〃	浸水面積 619.6ha，床下浸水 327棟 全壊流出 1棟 半壊床上浸水 133棟
昭和46年８月29日	台風23号	堤防漏水，河床洗掘及び低水護岸の被災	浸水面積 403.4ha 半壊床上浸水 348棟 床下浸水 272棟
昭和47年７月23日	台風９号	低水護岸，根固の被災	浸水面積 1,769ha 半壊床上浸水 221棟 床下浸水 493棟
昭和49年９月２日	台風16号	護岸，根固，水制の被災	浸水面積 544.8ha 半壊床上浸水 14棟 床下浸水 105棟
昭和50年８月16日	台風５号	堤防溢水（中筋川）破堤 法面崩壊，洗掘	浸水面積 4,159.6ha，床下浸水 264棟 全壊流出 11棟 半壊床上浸水 520棟
昭和54年９月30日	台風16号	堤防溢水による被害（中筋川） 河床洗掘，河岸崩壊	浸水面積 410ha 半壊床上浸水 82棟 床下浸水 296棟

第２節　治水計画

1.　改修計画の変遷

渡川流域は台風常襲地帯であり，古くからたびたび大洪水に見舞われ，その都度多大の被害を被っていた。しかし，明治時代には，当地が僻遠の地であったこともあり，道路の改築が焦眉の急務であると考えられたため，明治３年，19年，23年，32年の大洪水にもかかわらず，河川改修は村費，私費をもってわずかに在来堤の修復等が行われていたにすぎない。

第４節　災害復旧

表３－４－１　渡川の主な直轄河川災害復旧事業費の推移

発生年月日	災害名	災害復旧事業費 千円	昭和63年換算　災害復旧事業費　（総合卸売物価指数より） 千円
S．18．7．		303.6	106,745
S．20．9．	枕崎台風	192.0	39,418
S．21．7．		3,276.0	144,799
S．21.12．	南海大震災	102,377.0	1,292,048
S．22．7．	梅雨前線豪雨	46,444.0	692,016
S．23．7．		8,000.0	44,800
S．24．6． S．24．8． S．25．7．	台風２号（デラ） 台風９号（ジュディス） 台風９号（ヘンリー）	47,223.0	160,558
S．25．8．	台風７号	9,647.0	27,976
S．30．9．	台風22号	1,035.0	2,174
S．34．8．	台風６号	21,806.0	45,793
S．35．8．	台風16号	34,685.0	69,370
S．36．9．	台風18号	21,067.0	42,134
S．38．8．	台風９号	148,526.0	297,052
S．39．8． S．39．9．	台風14号 台風20号	94,256.0	188,512
S．40．9． S．40．9．	台風23号 台風24号	138,621.0	277,242
S．41．8．	台風13号	86,060.0	172,120
S．43．4． S．43．8．	日向灘地震 台風10号	108,701.0	206,532
S．45．8．	台風10号		
S．46．8．	台風23号	163,987.0	295,177
S．47．7．	台風９号	75,739.0	136,330
S．49．9．	台風16号	312,016.0	374,419
S．50．8．	台風５号	303,311.0	333,642
S．52．8．	台風７号	352,905.0	388,120
S．53．8．	台風８号	193,686.0	213,055
S．54．9．	台風12号	121,218.0	121,218
S．55．8．	停滞前線豪雨	82,720.0	74,448
S．56．7．	台風10号	274,122.0	246,710
S．57．8．	台風13号	1,157,368.0	925,894
S．57．9．	台風19号	91,814.0	73,452
S．58．9．	台風10号	849,491.0	764,542
S．62．7．	梅雨前線豪雨	89,294.0	89,294
S．62.10．	台風19号	168,849.0	168,849
S．63．8．	低気圧豪雨	386,227.0	386,227

1.　昭和21年12月　南海大地震災害

12月21日，渡川は南海大地震に見舞われ，上流は佐田地区より下流の鍋島まで，既設堤防は幹川渡川並びに支川後川を合わせて，全長約14㎞に亘り，最大４ｍ最小でも30㎝の沈下を生じた他，各地において亀裂，崩壊の被害を受けた。

特に甚大な被害を受けたのは，渡川右岸入田堤防，後川右岸中村堤防，同左岸佐岡堤防であって，堤体沈下のため堤防高は計画高水位以下となった箇所が多く，毎年１回予想される程度の出水にさえ危険を感ずるようになった。

この他，一般災害についても，中村町は死者273，負傷者1,034，全戸数2,177のうち全壊1,621，半壊696，火災163戸に達し，四万十川橋はトラス橋８連のうち６連が落橋した。

復旧について，（当時の記録によると）「この自然の猛威に工事関係者一同，一時は呆然自失為す術を知らなかったが奮起して」12月25日直ちに震災復旧工事に着手したが，完全復旧するまでには，事業費102,376,776円を投じ，昭和26年度まで実に６カ年を要した。

2.　昭和38年度災害

昭和38年７月30日，グアム島北西に発生した台風９号は，四国南方海上を北北西に進み，８月９日13時には九州に上陸したが，渡川上流域では９日早朝より豪雨となり，舟戸で８日９日の２日間で1,000㎜を突破したほか，各観測所もほぼこれに近い降雨を記録した。このため具同量水標においては毎時70～100㎜という上昇率を示し，息つく暇もなく９日10時には指定水位3.5ｍとなり14時には警戒水位6.5ｍを越えたがなお増水を続け，９日21時30分から22時の間には，HWLまでの暫定断面個所が溢流を始め，瞬時にして古津賀堤防では100ｍ，84ｍの２カ所を，佃地区では184ｍを破堤した。

９日24時には，具同において10.45ｍの最高水位（具同における計画高水位は10.92ｍ）を記録し，ピーク流量は計画高水流量13,000㎥/ｓを越える13,300㎥/ｓを記録し，昭和10年洪水の16,000㎥/ｓに次ぐ戦後最大の洪水となった。古津賀地区は全地区浸水し，流失家屋全壊，水没家屋10数軒に及び，浸水家屋は200戸に達する大被害をこうむった。また一方，中筋川沿川は甲ヶ峰山開削中で予定水位までの水位低下は行えず，本川の逆流により堤防は暫定断面は言うに及ばず計画堤防竣工箇所においても溢流すること0.3～0.4ｍとなり堤防は１部法崩壊にとどまったが，浸水平均水深４ｍという水位の上昇をみたため浸水家屋330戸と言う大被害を受けた。上記箇所以外も中村市内は，殆どの地区で水害の大被害を受けた其の一番浸水家屋の大であった所は，旧下田町で其の戸数400数軒を数えた。

復旧工事は減水した11日夜から緊急復旧に着手し破堤個所の築堤土量47,000㎥を約15日間で概成し法履工として蛇篭施工を含め９月16日に竣工した。

河川災害はこのほか入田において漏水が発生したほか護岸，根固の被害を含め，本川５ヵ所，後川１カ所，中筋川１カ所におよび合計148,526円の大被害を受けた。

3.　昭和49年８月台風16号災害

９月１日から台風16号の接近による降雨のため，具同観測所のピーク水位は6.93ｍを記録し，中筋川の磯ノ川観測所でも6.79を記録した。

この洪水により，渡川におて２カ所，中筋川で４カ所，後川でも５カ所に洗掘崩壊による被害を受けた。

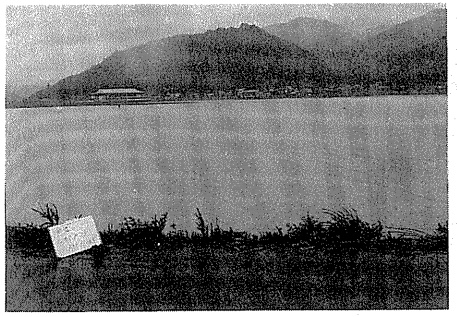
この他，一般災害についても各地において人家，田畑，道路等の冠水や浸水による被害が生じた。

4.　昭和57年８月台風13号災害

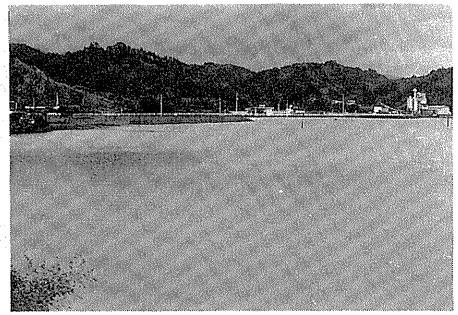
８月26日からの強雨の影響により大正地点では27日警戒水位に達し，ピーク時には9.63ｍを記録したのを始め，各地で水位が上昇し渡川の具同地点においてもピーク時には8.80ｍとなり，戦後第２の出水を記録した。

この洪水において，堤脚洗掘が渡川で３箇所，中筋川で２箇所，後川でも９箇所生じたほか，堤防漏水が中筋川で８箇所，後川でも３箇所に生じた。

昭和57年度及び昭和58年度において復旧工事を行った。



安並（Ｓ57．８．27台風13号）



有岡（Ｓ57．８．27台風13号）

第５節　災害復旧

1.　直轄道路災害復旧事業

(1)　直轄道路災害復旧事業の概要

直轄道路災害復旧事業は，豪雨，洪水，暴風，高潮，地震，波浪，地滑り等の異常な天然現象に因り生ずる道路の損壊，滅失，埋没等の災害を対象としており，道路法，公共土木施設災害復旧事業費国庫負担法等に基づいて，その採択要件を満たした被災箇所の復旧工事を実施するものである。

四国においては，山岳道路が多く，険しい地形と厳しい気象条件の為に，しばしば道路災害を受けているが，前出の管内指定区間の概要で述べたように，当事務所管内では，地質が比較的安定していること，又危険箇所における防災工事の進捗等により，他の事務所管内の路線と比較すると被災の頻度及び規模共に小さい。

道路災害の予防措置として行っている防災工事は，管内の危険箇所を一括調査し，計画的な事業執行を目的とした，「落石等危険箇所点検」（通称防災点検）に基づき維持修繕事業の主要な事業の一つとして実施されている。

今日においても，より一層の防災事業の推進を計るとともに後述の異常気象時における対応の充実等により，災害の回避に努め道路管理者の責務を果たすべく努力している。

なお当事務所の，昭和61年度における防災点検一覧表を表４－５－１に，又過去における災害復旧事業の一覧表を表４－５－２にそれぞれ示す。

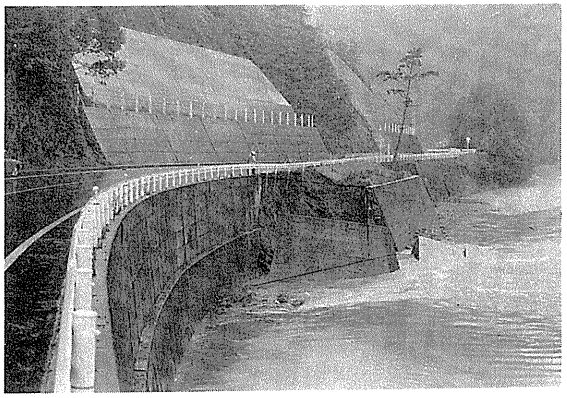
表４－５－１　61防災点検一覧表

金額単位：百万円

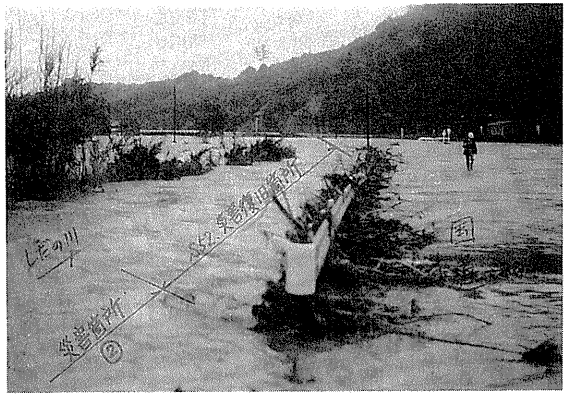
費目 / 項目	維持		修繕		改築		計	
	箇所	金額	箇所	金額	箇所	金額	箇所	金額
61点検全体事業	41	142.0	102	2,255.0	0	0	143	2,397.0
S 63迄実施事業	5	29.5	17	305.8	0	0	22	335.3
H 1 計画事業	6	21.5	6	153.5	0	0	12	175.0
H 1 迄進捗率	0.27	0.36	0.23	0.20	－	－	0.24	0.21
H 2 以降残事業	30	91.0	79	1,795.7	0	0	109	1,886.7

表４－５－２　直轄道路災害復旧事業一覧表

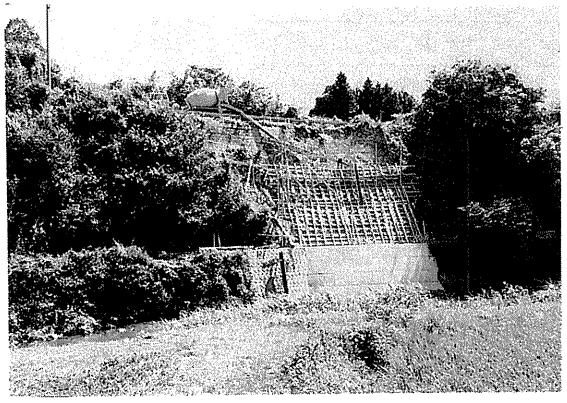
被災年月日	被災原因	被災箇所	被災内容	復旧内容	復旧額 単位：千円	摘要
昭和46年９月10日	秋雨全線豪雨	幡多郡窪川町峰の上	山側法面崩壊 L＝100m	切土，法切，法枠，植穴等	20,959	連続雨量（窪川土木）179㎜
〃　９月18日	〃	幡多郡佐賀町横浜	〃 L＝50m	切土，法切，擁壁，植穴等	3,065	〃　（中村市具同）257㎜
昭和47年７月24日	台風９号	宿毛市与市明	〃 L＝80m	切土，法切，植穴，法枠等	11,615	〃　（　〃　）374㎜
〃	〃	中村市有岡	川側法面崩壊 L＝20m	盛土 ブロック張等	5,388	〃　（　〃　）〃
昭和50年８月18日	台風５号	宿毛市野地	路側川側擁壁洗掘倒壊　L＝17m	盛土，擁壁等	7,218	〃　（宿毛市）230㎜
昭和52年９月10日	台風９号	幡多郡大方町田の口	路側石積擁壁　流失 L＝60m	擁壁等	9,427	〃　（中村市具同）105㎜
昭和53年５月17日	５月集中豪雨	幡多郡大方町上田の口	〃 L＝50m	擁壁，ブロック積等	7,053	最大24時間雨量（中村市具同）258㎜
〃	〃	〃	〃 L＝30m	ブロック積等	5,160	〃〃
昭和55年10月14日	台風19号による豪雨	宿毛市聖ヶ丘	山側ブロック積クラック　L＝45m	擁壁，法枠等	27,639	〃　（宿毛）140㎜
昭和60年４月12日	４月豪雨	幡多郡佐賀町荷稲	川側法面崩壊 L＝11m	擁壁等	8,730	〃　（佐賀）219㎜
合計			10 箇所		106,254	左記の数字は災害復旧事業に採択されたものであり，保留解除等による維持修繕事業は含まない。



● 川側洗掘による被災状況
（昭和50年，台風５号，宿毛市野地）



● 路面冠水による被災状況
（昭和52年，台風９号，大方町田のロ）



● 災害復旧工事の状況
（昭和60年，４月豪雨 佐賀町荷稲）